

戦後における沖縄系移民のエスニック

職業としてのクストウーラ（縫製業）*1)

—ミドルマン・マイノリティへの道（1）—

森 幸一

-はじめに-

筆者は現在、サンパウロ市において沖縄出身移民及び沖縄系日系人の形成した都市エスニック・コミュニティの調査研究に従事している。日系人は1940年代からサンパウロ市を中心に、都市移動を活発に行い、現在においてはその9割近くの人口が都市居住者となっている。しかし、日系人の都市移動とその後の定着などの都市適応過程、また都市エスニック・コミュニティの形成や展開過程、更にはそこでの家庭生活などはほとんど研究されていないのが現状である。*2) 筆者の関心は、都市居住日系人の体験を実証的に調査し、そのエスニックな社会的世界やエスニシティの組織化や動員のされ方、さらには日系人の社会経済上昇、その結果としてのミドルマン・マイノリティ化などを考察、都市における日系人のエスニシティの特質を解釈することにある。筆者はこれまでも沖縄系<ユタ><ムヌシリ>のライフ・ヒストリー的研究や琉球芸能文化に関する研究、更にはボリビアの沖縄移住地の研究*3)を実施していること（まだ継続中）、それに筆者自身の沖縄への憧憬もあって、サンパウロ市の沖縄系エスニック・コミュニティを研究対象としている。

本稿では、現在筆者がフィールドワークを実施しているサンパウロ市内東部のピラ・カロン地区沖縄系エスニック・コミュニティにおける第1次的エスニック職業であったクストウーラ（縫製）>業の成立と展開過程をミドルマン・マイノリティ化プロセスとして記述することにしよう。

ミドルマン・マイノリティの概念は、Blalock[1967]が提唱して以来、エスニシティ研究者の間で良く利用されるようになった概念である。このBlalock以降、多くの研究者によって、その概念規定がなされている。例えば、Zenner[1982]は「当該集団構成員のうち、均衡を欠くほどに多人数の人々が商業上の小企業経営に従事するか、あるいは同一集団の人々によってそのような小企業に雇用されている」少数民族集団をミドルマン・マイノリティと規定している。また、Van den Berghe[1981]はより広義に「物品ないしは技能を売る職業を特質とするエスニック・グループ」と捉え、その経済活動の側面から見ると、ミドルマン・マイノリティは支配階級よりは貧しくもともとの住民よりは富裕で、この両者を媒介する役割を果し、資本・資財の不足から規模の大きな資本家的経営は行わずに、家族労働力を投下した労働集約型の企業体を特徴とし、雇用に関しては親族的、あるいはエスニックなネポチズムを中核的原理とすると要約している。また、Bonacich[1973]はミドルマン・マイノリティの職業的特質ではなく、その一般的な特徴を強い内婚性、居住の集中性、民族学校の運営、文化特性への固執、政治的関与の回避、強力な共同組織の維持等と指摘している。ところで、ブラジルの日系人のミドルマン・マイノリティに関しては、前山隆[1990]が概観的・総論的に論じているが、筆者の関心はむしろ、ピラ・カロンというエスニック・コミュニティの成立との関連における沖縄系人のミドルマン・マイノリティ化のプロセスの事例研究にある。

ビラ・カロン^{*4)}—沖繩系都市エスニック・コミュニティの概要

筆者が調査を行っているのはサンパウロ市内東部に位置するビラ・カロン地区である。沖繩系の人々はここを<ビラ・カロン><ビラ・カロン村><カロン>と呼称している。沖繩系の人々が呼称する<ビラ・カロン>はサンパウロ市の行政単位としてのバイロ(Bairro)の名称であるが、沖繩系の人々のいう<ビラ・カロン>は地域的にはそれを含みながら、周辺の街区(Subdistrito)やDistritoにまで拡大された区域となっている。沖繩系の人々が認識する<ビラ・カロン>という空間は、そこに居住する非沖繩系日系人も非日系ブラジル人も含まれていない<想定的な沖繩系共同体>である。この空間に居住する沖繩系日系人の代表的な組織は沖繩県人会ビラ・カロン支部であるが、この組織はリベルダーデ地区にある沖繩県人会の地域的支部であるのは勿論、ビラ・カロン地区在住沖繩系日系人の地域の中核的エスニック組織となっている。それは内部組織として青年会、婦人会、老人会等の性別年齢組織や日本語学校、スポーツ、カラオケ等のセクションを持ち、約450世帯の会員が属する21の区に区分され、会長、副会長、書記、事務長等の執行部により統括されている。このエスニック組織に加入するのはビラ・カロン地区に居住する沖繩系日系人の約半数であると推定されている。ビラ・カロン会館は支部活動の中核であるばかりでなく、この地区に住む沖繩系の人々の結婚式、トウシビーの祝い(年祝い)、小祿、読谷等の同郷者会、ボリビア親睦会という同じ移民経験を有する沖繩系人の組織、ビラ・カロン在住者を中心に組織される芸能組織—古典音楽保存会、民謡協会、協和劇団等—等の活動に利用される等エスニシティの可視的シンボルとなっている。ビラ・カロン地区の中心は、コンセレイロ・カロン大通で、ここには多数の沖繩系、日系の店舗や事業所が軒をならべている。そこには日本食レストラン、日本食品店、旅行社、カラオケ等も営業し、日常的な生活はほとんど沖繩系商店で間に合わせることも可能である。また、当該地区には琉球民俗芸能や沖繩空手の教師・師範らが道場、研究所を開設したり、三味線店が営業していたりと沖繩の民俗芸能文化へのアクセスも存在している。

—註—

- *1) サンパウロ市における縫製業の成立と展開には、シリア・レバノン系、アラブ系、ユダヤ系移民、イタリア・ドイツ系等のヨーロッパ移民の女性労働力、さらには沖繩系人、近年においては韓国系移民やボリビア人移民等各国からの移民集団が関係している。この産業部門と移民集団の関連は重要な歴史的研究のテーマであるとともに、都市におけるエスニシティ間の関係等の特徴を考察する重要な人類学的研究テーマである。筆者は、シリア・レバノン、アラブ系マスカットの商品としての衣服製造(第1次世界大戦による輸入断絶を契機とする)に端を発し、ニューカマーズである韓国系移民が参入、ボリビアからの非合法労働力を雇用してかなりの成功を収めている現在までの、サンパウロ市における縫製業の成立と展開と移民集団の関係に関する論考を準備中である。
- 2) 都市における日系人の研究は専ら宗教教団を中心にした宗教現象がエスニシティとの関連において実施されてきただけである。
- 3) 沖繩系霊能者の研究成果のごく一部は上智大学イベロ・アメリカ研究所「イベロアメリカ研究」に発表、また琉球芸能文化に関してはトヨタ財団提出報告書「ブラジル・サンパウロ市における沖繩系芸能文化の変遷—エスニシティとの関連において—」さらに沖繩移住地の調査報告は東北大学日本文化研究所紀要に「ボリビアの沖繩系移住地における現地ボリビア人労働者の流入と定着—」として成果の一部を発表している。

さらに、沖縄系日系人の信仰＝祖先崇拝を支えるユタやウガンサー等も数名おり、先祖祭祀や問題解決に重要な役割を果たしているほか、沖縄系信者の多いキリストの御霊教会（プロテスタント系）や宮崎カリタス会（カトリック系）も存在し、幼児教育や日本語教育に携わっている。また、後に簡単に触れるように、この地域に在住する沖縄系日系人には親族関係（同郷関係も多分に重複する）に基づいたチェーン・ミグレーションの結果、親族組織の再組織化、〈シマ〉の再生等も発生している。

ところで、サンパウロ市の行政単位であるピラ・カロン地区への沖縄系日系人・移民の移動が開始されるのは1950年代初頭のことである。当時のピラ・カロン地区はサンパウロ市市街地の外延部に位置するシャーカラ地帯であった。市街地としてのロッテアメント自体は今世紀初頭から開始されているが、当時はロッテアメントこそ行われていたものの住宅が存在したのはコンセイロ・カロン大通沿い付近だけであったという。つまり、ピラ・カロン地区への移動と定着はサンパウロ市のペリフェリー地帯へのそれであり、戦前移民がコンデ街やカンタレーラ市場付近の中心部へと求心的に移動した動きとはちょうど逆の遠心的移動であったといえる。この戦前・戦後の日本人移民・日系人の都市移動地の選択自体が永住主義析出に基づく日本人移民の都市移動戦略を良く物語っているといえる。

さて、ピラ・カロン地区への沖縄系人の移動は1950年代初頭に起り、56年には、沖縄系人26世帯によって早くも沖縄県人会ピラ・カロン支部が結成、その後会員数は急増し、70年代には500世帯と県人会支部としては最大規模となっている。移動の当初はその主体はサンパウロ州奥地からの旧移民であったが、1952年からは、呼び寄せ戦後移民が、60年代初頭からはボリビア移民の再移動者等が親族・同郷・友人・知人等のエスニックネットワークを利用しながらピラ・カロン地区に移動し、戦後移住者を中核とする組織となっている。

以上の条件から、ピラ・カロン地区の沖縄系日系人はこの地域で、ある程度完結した沖縄的生活や〈ウチナンチュー〉としてのアイデンティティを維持することが可能となっているのである。この地域に居住する沖縄系日系人という集合体全体を包括する活動はなく、多様に、そして重層的に存在するさまざまな団体（や世帯）が特定の目的をもって開催するフォーマル、インフォーマルなイベントへのエスニック動員の枠組としてこの集合は機能しており、ピラ・カロンの都市エスニック・コミュニティはイベントを契機に動員されるエスニック・ネットワークの累積体として存在している*5)。

—註—

4) ピラ・カロン地区に在住するのは沖縄系日系人だけではなく、本土出身の移民やその子弟も約1千世帯ほど居住し、その半数ほどでピラ・カロン文化体育協会という〈日本人会〉を結成している。また、この地区内には奄美諸島出身移民約3百世帯から形成される奄美会の〈奄美会館〉も存在している。これらの本土—奄美—沖縄という出身地別のエスニック組織化は非常に興味ある点である。ピラ・カロン地区には、沖縄系の信徒を持つプロテスタント系教会、カトリック教会とともに生長の家が多く沖縄系信者を吸収している。その一方で、稲荷会、創価学会等の宗教教団は〈ヤマト〉の宗教として、あまり沖縄系人を引き付けてはいない。つまり、信仰的側面でもヤマト—ウチナーはある程度の棲みわけをしている。この中で、注目されるのは、シャーマニズムの伝統を強く持つ奄美出身の人々が祖先崇拝や問題解決の際に、沖縄系ユタのもとをたずねるのか、それとも別の解決を求めるのか、いかなる選択を行っているかである。

5) 重層的なエスニック組織・団体の行事の際には、エスニック・ネットワークを動員して琉球民俗芸能—舞踊・民謡・太鼓等—の実施と、ソウキソバ、イリチャー、ブザー、ヒージャー等の民族

ビラ・カロン地区の縫製業—事例提示—

本稿の課題であるビラ・カロン地区のクストウーラ（縫製）業についてみよう。屋比久の『沖縄移民誌』の記述によると、1985年1月現在、沖縄系日系人の職業としては「パステス業が一千家族、フェイランテが二千家族、縫製業が二千家族位従事」[屋比久 88頁]しており、縫製業の中心は「ビラ・カロン地区とカーザ・ベルデ地区、サンマテウス、ペーニャ、ビラ・プルデンテ区、ビラ・アルピーナ区」[前掲書 267頁]であるという。1978年の沖縄協会（県人会の前身）のサンパウロ市内の会員数は4062世帯、この会への参加率を沖縄系世帯の半数としてもクストウーラに従事する沖縄系世帯は20%は超えるかなりの比率に達していると推計することが可能である。一方、琉球大学地理学教室の調査によると、1984年当時のビラ・カロン在住沖縄系日系人の職業構成はクストウーラが36%と断然多く、続いてフェイランテ18%（このフェイランテは大半がパステル業である）とこの2つの職業だけで過半数を超える2大職種となっているのが理解できる。これまで、日系人の戦後の初期エスニック職業としては、洗濯業、農業関連の農産物仲買、フェイランテ、キタンダ等農産物関連職種が大きく取り上げられてきたが、沖縄系移民の場合では、縫製業（工業）が重要な初期エスニック職業の一つになっている点は注目されねばならない。また、沖縄系の場合、野菜販売のフェイランテの出現は、むしろ後発で、当初はパステル販売に展開した事実は、同じフェイラというく場への参入の場合でも、本土出身の移民と沖縄系移民の差は重要な事実であるように思われる。フェイラにおけるパステル販売は現在においても9割を沖縄系人が占有する排他的エスニック・ビジネスである。

ビラ・カロン地区の極初期の職業として、沖縄系人が選択したのはフェイラ・リーブレ（自由青空市）でのくフェイランテ*6)であった。このフェイランテという職業で思い浮かべるのは野菜類の販売であるが、ビラ・カロン地区の沖縄系人の場合、野菜販売は後に出現したもので、極初期において販売された商品はパステル、既製服、日用品、ニンニク・胡椒等の調味料等であった。フェイランテは認可制であったが、沖縄系人は無認可のマレットイロとしての参入であった。パステルという商品は、当時、すでに中国系移民によって、店舗販売というかたちではサンパウロ市内にも存在したが、フェイラでのパステル販売は存在していなかった。ビラ・カロン地区の沖縄系人の間では、サントス市で中国系パステラリアで技術を覚えた沖縄系旧移民がサンパウロ市で開始したというのが成立神話で、それがビラ・カロン転住者によっても実施されたのだといわれている。フェイランテという仕事は小額の資本（その日販売する商品を仕入れる資金）がありさえすれば、移動した翌日からでもそれほど言葉の問題もなく商売ができたという利点があった。

—註—（前項続き）

料理がセットとなって提供されており、ウチナンチュー・アイデンティテイの維持や醸成に大きく機能している。ところで、ウチナーというエスニシティの最大の動員は県人会本部行事においてなされるが、近年では、国境を超えてのウチナー意識に基づいた動員も盛んであり、トランス・エスニシティの興味ある事例である。また、この問題と関連して、90年代半ばから開始された日本へのくデカセギもその送り出しを一手に引き受けているのはビラ・カロン内に営業する複数の旅行業者であり、横浜市鶴見区にある沖縄県人会をネットワークの結節点としながら、日本でもビラ・カロン在住者間のネットワークが維持される等国境を超えたくウチナンチューネットワークが強固に鮮明になっている。

ビラ・カロン地区のクストウレーラ業成立はフェイラと密接な関連がある。ここでは、ビラ・カロンにおけるクストウレーラ（縫製）業の成立に関して、N家の事例から見ることにしよう。

<事例1> フェイランテからクストウレーラ業へ（旧移民N家の事例）一

この事例は1936年にブラジルに家族で移住し、モジアナ線のファゼンダに配耕され棉や落花生作りに従事した沖縄県小禄村字田原出身の家族の事例。先行した移住者として母方の叔父3名の家族がある。モジアナ線でのコロノ期間を経て、棉の借地農となり資金を貯えて自営農に展開しようとしたが、土地うりの詐欺に会い、父親が農薬中毒になり農作業に従事できなくなったことや子弟の教育のために、ほとんど一文無しの状態で1953年母方の叔父を頼ってサンパウロ市ビラ・カロン地区に移動してきた。この家族の世帯主は戦前にフィリピン移民の経験があり、そこで洋服仕立ての技術を習得して、洋服仕立て業を生業にしていた。この技術がクストウレーラ業に生かされることになる。

サンパウロ市に移動してきたときの家族構成は世帯主、妻、15歳を頭に7歳までの4男1女の子供7人家族であった。サンパウロ市に出たのは、上の理由もあるが、先にサンパウロ市に出ていたウルクンチュー（小禄出身者＝同郷者）からサンパウロ市では金が儲かるという情報を得ていたからだ。サンパウロ市に出て来たのは1953年8月で、先にビラ・カロンに出てフェイラをやっていた母方叔父を頼ってきた。最初の住まいはこの叔父の住宅の裏にあった別棟の住居。この叔父はマレットイロのフェイランテで、既製服、日用品、ニンニク（アーリヨ）等の調理材料を販売していた。サンパウロ市に出た翌日から妻は叔父とともにサンタ・ローザ街にあった商店でニンニク、胡椒、楊子等の日用品を仕入れ、それを粗末な台の上に乗せて販売した。子供たちも末弟を除いては、各自が風船、にんにく、楊子、父親が耕地時代に購入した中古のシンガーミシンで縫ったボネー（帽子）等をセスタ（籠）に入れてフェイラで販売し、家計を維持した。

家族総出で働き、1年後には、別の母方叔父と共同購入で、シダーデ・パトリアルカ地区にロッテを購入、そこに住宅を建設した。この購入の際には、叔父やウルクンチューを子供とする<タノモシ>を親となって組織し、頭金を作った。

叔父や既製服をフェイラで販売しているウルクンチューから、フェイラよりも世帯主のミシンの技術を活かして、縫製業をやったら子供たちも働き手になるから儲かるといわれ既製服を仕入れるユダヤ人商店を紹介してもらった。まず世帯主がミシンで子供用のジーンズを縫い、それをアモストラ（見本）として紹介先の商店に持ち込む。その商店で縫い具合を判断し、OKとなると下請けの仕事をとることができた。この当時はソーシャルなズボン（カウサ・ソシアル）ばかりの注文で、裁断された服地を大きな麻の袋に入れて戻り、それを縫って麻袋に入れて注文主に届け、1枚いくらの縫い賃を稼ぐことになる。

一註一

6) フェイラでのパステル販売に関する考察は別稿を準備している。現在、ビラ・カロン地区の自営業種では金物業、美容品販売業が非常に多く、それぞれエスニック同業者組織が形成され、エスニック同業者の利害を守る活動を行っている。このエスニック職業の第2次的展開は早くは1960年代に発生するが、急増するのは70年代後半からである。

注文取りは当時年頃になってフェイラでの仕事に恥ずかしさを感じるようになっていた長女（15：この長女はグルッポも終え、ポルトガル語は堪能であった）の仕事で、父親が作った見本をもって、プラス地区のオリエンテ街、ボン・レチーロ地区のジョゼ・パウリーノ街のユダヤ系、シリオ・リバネス系衣服商あたりを注文をとって歩いた。

最初の頃は注文を受けて世帯主が縫製の仕事を行っていたが、フェイラやクストウーラで貯える資本をミシン購入に投入し、徐々にミシン台数を増やすとともに、子供たちが縫製に携わるようになって行った。ズボン縫製の難しい工程は世帯主が担当し、子供たち（年長）は日中にミシンを踏み、夜間学校に通学した。4、5年も経つと、信用も高まり、注文取りに歩かなくとも、パトロンが注文をもって来るようになった。また、はじめのうちは子供たちが手分けしてやっていたパッサ（炭をいれたアイロンでアイロンかけする）や糸きり等の単純な作業は沖縄系の後続移動者や付近に住む非日系ブラジル人女性を孫受けの労働力として採用することになった。この当時、多くの沖縄系後続者、特に小禄出身者や親戚達がこの世帯に縫製業の技術習得の〈見習い〉として半ば住込みで就労していた。事例2のT家の長男もその一人であった。

1959年には、フェイラで就労していた母親が病気でフェイラを止め、また、子供たちも大学や高校を終えて、それぞれ公務員や工場労働者、自営業者（美容師—後に花売りのフェイラ）等に展開して行ったために、家内工業的な縫製業〈モン・デ・オーブラ〉は止め、高級洋服注文仕立てを父親だけで行うようになった。1961年／62年頃に、クストウーラで貯蓄した資本でピラ・カロン地区に住宅を購入した。

この事例は1950年代前半にフェイランテから家族労働力を利用した家内工業的縫製業へと展開した事例である。沖縄系人の間では、ユダヤ、シリア・レバノン、アラブ系衣服商店の下請け縫製業を〈モン・デ・オーブラ（労働力）〉と呼んでいる。この事例は〈モン・デ・オーブラ〉成立の事例であるが、ここでは（1）すでに縫製業の技術を取得していた世帯員の存在（2）ウルクンチュー、親族関係ネットワークを通じての情報や資源の提供（3）ポルトガル語の堪能な子供の重要な役割（4）エスニシテイの経済的動員である〈タノモシ〉による資本作りとその投下、及び家族労働力の投下による事業拡大（5）エスニシテイ（あるいは親族・同郷関係）に基づく情報や技術の伝達等が重要である。こうした結果、ピラ・カロン地区でのクストウーラ業への同郷者の参入とその結果としてのピラ・カロン地区への特定シマ出身者の集中という現象を発生させることになる。例えば、ウルクンチュー・ネットワークの動員の結果は、小禄村出身のピラ・カロン地区での卓越と初期におけるウルクンチューのクストウーラ業への集中であり、1984年時点での支部会員世帯に占める小禄村出身者は22.4%に達している*7)〔琉球大学・15頁〕また「相互経済支援組織」ともいえるタノモシという文化資本は、クストウーラとしての独立過程、都市住民としての住宅購入過程をスムーズに可能たらしめ（ペリフェリー地帯であったことが住宅や土地購入価格が比較的安価であったこととも関係）、結果としてのミドルマン・マイノリティ化を促進することになった。

—註—

7) 1973年時点のピラ・カロン地区の出身地別構成（支部会員だけに限定・会員数は346世帯）は1位が小禄村で109世帯、2位が西原村27世帯、3位が中城村18世帯となっており、小禄村出身者が圧倒的に多い。小禄村出身者の集団居住地区にはカーザ・ベルデ地区もあり（会員371世帯中57世帯）しかもここも縫製業者が多い地域となっている。（琉球大学 1986 121頁）

次の事例は家族労働力を投下しての家内工業的縫製から、機械類を整備し、非家族労働力を雇用し縫製業の〈工業化プロセス〉を歩み、その後子弟の独立に際して、縫製業関連の職種へと展開して行った世帯の事例である。

〈事例2〉 一家内工業的縫製業から〈工業化〉への移行・関連職種の成立（新移民T家の事例）

この事例は1956年2月家族8名で沖縄県那覇市（小禄村）からブラジルに移住した戦後移民のものである。この世帯の構成は世帯主（55才）その妻（46才）4男2女（もとも年齢が低いのが9才で、子供たちは最初から労働力として期待された）である。この家族は屋号を〈ミシンヤ〉といい、移住前も母親が縫い物をして家計を支えていたという。また、ブラジルに移住する際には、半工業用ミシンを一台荷物として携行してきた。この家族は当初、ルセーリアの日本人移民の耕地に配耕される予定であったが、その耕地に向かう汽車の中で、霜に焼かれて枯れたコーヒー樹を見て農業に見切りを付け、サンパウロ市のピラ・カロン地区に居住していた父の従兄弟のもとで移民生活を開始した。すでに56年の段階でピラ・カロン地区にはウルクンチューが何家族か居住していたと言う。

ピラ・カロン地区では父の従兄弟の住宅の別棟に居住した。その従兄弟から、やはりウルクンチューで世帯主の妻の姉妹の嫁ぎ先の兄弟（事例1）がクストウーラをやって大変に繁昌しているという情報を得て、早速、長兄と次男がピラ・カロンからシダーデ・パトリアルカまで1ヶ月間毎日通い、パッサ（アイロンかけ）を手伝いながら、縫製業の技術を習得した。一方、三男はフェイラで既製服を販売しながら縫製業もやっていた父の従兄弟（住宅を世話してくれた従兄弟とは別）の元に通い、やはり縫製業の技術習得に務める傍ら夜間学校に通った。この三男が働いた父の従兄弟がこの世帯がクストウーラとして独立する際に仕事取りの通訳として援助してくれた（この従兄弟は2世）仕事を取りに行くのは事例1と同様にプラスヤボン・レチーロ地区のシリア・レバノン系、アラブ系、ユダヤ系の衣服商店であったという。

技術を覚えるとこの世帯は独立してクストウーラを開始するようになった。家族労働力は豊富であったがミシンは沖縄から持参した半工業用ミシンが1台しかなかったために、旧移民でサンパウロ市内で美容師として成功していた父の従兄弟から借金し、ミシンを数台購入した。このミシンで世帯主と一番下の妹を除いた家族全員が縫製を行った。特に上3人の兄弟は注文取りから裁断したスボン布地の運搬等も分担、朝7時から夜中の12時まで休みなく仕事をした。クストウーラを開始して2ヶ年半後にはピラ・カロンに住宅を購入、また、ウルクンチューや親戚等と〈タノモシ〉を組織し、その資金でミシンやアイロン等の機械・機具類に投資を重ねていった。ちょうど、サンパウロ市が大きくなる頃で、注文はいくらでもあったという。工業用ミシン等の機械が揃うと、近所に住む非日系ブラジル人女性を雇用労働力として採用したり、沖縄からの独身青年を住込みパッサドル（独立制のアイロンかけ、1枚いくらかで請け負わせる）等に雇用したり家内工業を超えた〈工業化〉を目指した。（この世帯がピラ・カロン地区で最初に家内工業的縫製業から縫製業の工業化を実現した）また、この時期には言葉の不自由な新移民に代わり、〈パトロン〉から注文を取り、仕立ての生地や縫いあがったズボンを〈パトロン〉に届けるエントレガドルという関連職種も出現した。このプロセスは後続の沖縄系移民たちへの技術習得の機会でもあり、多くの沖縄系人が技術を習得独立して行った。最盛期には20—30名の女性労働力を雇用するまでの規模となったという。縫製業の規模が拡大するに従い、

ミシンの修理技術や購入等に関する知識も増加し、長兄は沖縄系人へのミシン修理や購入の世話等を行うようになった。

しかし、兄弟姉妹の協力と連帯も、それぞれが独立する時期となった1960年代後半に終焉を迎える。その契機となったのは家業の中心として兄弟の纏め役となってきた母親の死亡であった。母親が死亡した1967年には兄弟姉妹間に財産をめぐる確執が起り、長兄がクストウーラとミシン修理業・部品製造業として独立、また同年には三男もミシン1台を分与財として分家、2男は70年代初頭にランショネット業に展開した。家業の縫製工場は兄弟姉妹が独立を遂げた時点で閉鎖し、末弟がその財産を継承、ミシン販売業（その後にはガソリン・ポスト経営へと多角化経営）へ投資して、兄弟が分裂している。この兄弟姉妹たちの全てが沖縄系人と結婚、ビラ・カロン地区内に独立を遂げている。

この戦後移民家族の事例でもまた、事例1と同様、先行者としての親族・同郷関係者の存在が移動と都市での情報・技術獲得等に大きな役割を果しているとともに、移住以前にもっていた技術や移住時に携行したミシンの存在、さらには家族労働力の豊富さ等がクストウーラ業の選択と工業化プロセスを支えた条件となっている。また、この事例の特徴は、クストウーラ業が拡大する中で、クストウーラ業に関連する仕事—パッサドルやアントレガドル（何れも一時的な仕事となるが）、ミシン修理・部品製造、ミシン販売業等—がビラ・カロン内に出現していることである。これらの職種は後続者がクストウーラ業を開始するに際して、親族関係や同郷関係のネットワーク、文化的資本としてのタノモシ等とは違った意味で大きな役割を果しているという点である。すなわち、新しいパトロン探し、注文品の搬入搬出、煩雑な労働工程の分業体制、材料・機械購入の容易さ等の構造が出現したことで、後続者の同業種参入をより容易にし、促進せしめたのである。このパッサドルやアントレガドルは独身青年や家族労働力が揃っていない世帯が吸収される職種であり、こうした主体も吸収することでエスニック内縫製業分業構造は整備されていくのである。

次の事例3は〈モン・デ・オーブラ〉、工業化の段階から、さらに展開し、製造—販売の体制へと80年代の高インフレをバネにして大きく展開した事例である。しかしながら、高インフレ時代の終焉（リアルプランの実施）や経済開放政策、国内縫製業界にとってのブラス地区の重要性の相対化等の影響を大きく受けてもいる。事例1・2では、サンパウロ市の発展＝人口増加等＝が家族労働力を投下しての〈家業〉の成功を条件づけているが、事例3では、この条件を活かしながら成長したものの、その家業の維持や更なる展開は、家族労働力だけを投入しての家業経営を先行き不透明にしている。また、この事例では、事例1・2の時期と違って、カウサ・ソシアルからカウサ・ジーンズ（Gパン）への移行もある。ジーンズへの移行は1970年代初頭から起っている。

〈事例3〉—〈モン・デ・オーブラ〉から〈パトロン〉へ（製造・販売一貫体制確立）—（新移民TA家の事例）

TA家は世帯主夫婦と兄弟3名の5名で1959年、第7次ボリビア移民として、ボリビア沖繩第2移住地に入植、そこで米作や精米業に10年間従事した後、ブラジルに移住した一家である。ブラジルに再移住する前に、兄弟2人は〈視察〉と称して、姻戚を尋ねてサンパウロ市ビラ・カロン地区に一時居住し、再移住後の仕事を決定するためにフェイラ、パステル、クストウーラ業等の実態を実地に働きながら見分した。そこから得られた結論は「クストウーラはミシンに投資し、家族労働だけで一生懸命働けばそれだけ金になる」

というものだった。

沖縄移住地に所有していた土地や財産は処分し、家族の旅費や資金を作り、1970年には一家を挙げてサンパウロ市ビラ・カロン地区に移動した。ここには長兄の妻の一家がすでにクストウラ業を開始していた。妻の家族の世話で借家をし、T（事例2）のミシン販売店からミシンを購入し、応接間を「縫製工場」にして、家族挙げてのズボン縫製を開始した。朝7時から明け方の4時までミシンを踏む生活が続いた。仕事はウチナンチューの世話人（エントレガドール）が持ってきてくれる。この世話人はウチナンチューのモン・デ・オーブラ（請け負い）から派生した職種で、資本を蓄積した後カミニオン（トラック）を購入、パトロン（卸商・小売商）から仕事を請け負い、その仕事をモン・デ・オーブラに斡旋し、手数料を稼ぐ中間業者である。この当時、ウチナンチューの世話人は5、6軒あった。

また、この当時、モン・デ・オーブラの工業化を実施、非日系ブラジル人女性を2、30名雇用して大きくやっているウチナンチューもあった。

モン・デ・オーブラとして働きはじめて1年半がすぎ、すでに住宅購入資金程度の貯蓄はできていた。TA家の長男は沖縄出身の日系人が多く、土地や住宅価格も相対的に高かったビラ・カロン地区ではなく、それに隣接する新開地アリカンドウーバ地区に住宅とそれに隣接する土地を購入した。自宅裏の土地にはすぐに縫製工場を建て、ブラジル人労働者を15—20名ほど雇用しモン・デ・オーブラの仕事を拡張した。この工場建設資金やミシン類の購入はタノモシをあけて落とした資金で充当した。

家族以外の労働力を雇用したことで、これまでのようにエントレガドールを介在させての仕事だとどうしても仕事がきれることがあり従業員をあそばせることになるので、商店・卸商からの直接請負体制をとることを考えはじめていた。言葉の問題はボリビア時代にスペイン語を習得していたことで、ポルトガル語もすぐに覚え問題はなかった。また、縫製業界の仕組みも分かっていた。問題は注文を取り裁断された生地や縫い上げた商品を運搬するトラックがなかったことだった。これも、好都合なことに、請負賃金未払い問題の借金のカタとして中古の軽トラックを入手することができた。このトラックでプラス、ボン・レチーロ地区のレバノン、シリア、アラブ系商人らの店を訪問、注文をとって歩いた。仕事は順調だった。

1970年代初頭、ブラジルでもカウサ・ソシアル（スラックス）に代わって、若者たちの間を中心にジーンズが流行しはじめた。この流行を背景にウチナンチューのモン・デ・オーブラの中にもスラックスからジーンズの請負縫製へと展開する者も出てきていた。TA家でもある程度の資金の貯蓄はできたこともあって、約3万ドルほどをジーンズ縫製のための特殊機械（トラベッチ、マッキナ・デ・コース、マッキナ・デ・パッサンテ等）に投資した。「この人たちを14、5名雇用すると1年間に1軒は家を購入することができた」というほどにジーンズの需要は、ブラジル経済の高度成長の波にのって好調であった。76年にはアルゼンチンからボリビアから再移住していた弟を呼び寄せ、ジーンズ縫製の手伝いをさせた。この好調な期間に、TA家では弟らの分家独立用の住宅を投資目的もあって購入している。現在、家業は長兄が継いでいるが、一緒に就労した弟たちには分家の際に縫製業機械一式と自宅住宅を付与している。

カウサ・ソシアルからジーンズへの展開も順調に進み、資本を貯えることのできたTA家はそれまで、アラブ、レバノン、シリア、ユダヤ系移民の独占市場であった衣服流通（卸・小売）部門への進出を考えるようになっていた。「彼らにできて自分たちにできないこと

はない。自分たちには請負の技術がある」という自信があった。T A家に先立ち、同じポリビアからの再移住組でモン・デ・オーブラを大きくやっていたSやIがプラス地区にジーンズの卸の店をあげたいが、その資金を作る<タノモシ>に入ってくれないかと相談にきた。T Aも進出を希望していたので、大いに賛成した。

T Aの場合は、請け負い先のアラブ系商人のすすめや不動産に投資した資本の蓄積もあり、1980年に、購入してあった住宅3軒を売却、卸業進出資金を作り、プラス地区エミール街にジーンズの卸店のポントを借りて進出した。80年から85年にかけて、進出資金2万、3万ドルを<タノモシ>で獲得してはプラス地区に進出するポリビア再移住組が続々と出現した。沖縄系人のプラス進出組は合計で34、5名でうち80%がポリビアからの再移住組であった。T Aの弟たちが相次いでプラス進出を遂げたのもこの時期であった。

最盛期における沖縄系製造兼卸・小売業者34、5軒で、ジーンズの生産月間百万本、売上高1500万ドルにも達している。T A家では、この全盛期にプラス地区やボン・レチーロ地区にも卸と小売の店舗を開設、その経営を息子や娘という親族関係者に分担させ、家族経営体制を整備するとともに、ウチナンチュー・親族関係ネットワークを動員して、ポリビアのラ・パス、サンタ・クルス市、ペルーのリマ市等に支店を開業し、ブラジルの自社工場で生産されるジーンズの輸出を試みている。

90年代に入ると、コロール政権下での市場開放＝輸入自由化政策により、海外からの安価な商品が国内に流通しはじめた。ジーンズ業界においても台湾・中国製の安価なジーンズが国内市場に流入、これらとの競合の時代を迎えることになった。こうした外国製品との競合に対抗するために、それまではインフォーマルな<タノモシ>と情報交換の枠組となってきたウチナンチュー・プラス進出業者たちはT Aのリーダーシップにより、「プラス縫製経済協会」というエスニックな同業者組織を結成し、自分たちの利害を守るべく、活動を開始した。その活動の第1は資材・材料の共同一括仕入れによるコスト・ダウン、第2は苦手な法律や会計面の諸問題解決のために商法専門の弁護士／会計士の雇用、第3に業界内の情報交換・勉強会の実施であった。

市場開放・輸入自由化政策はさらにリアル・プランによっても推進されたが、リアル・プランの最大の問題はそれによってインフレが収束されたことである。高インフレ時代は、文化資本としての<タノモシ>による資本の調達とそれによるストックの確保、投資等が上手く機能し、インフレと<タノモシ>によって経営規模を拡大してきたといえるが、<タノモシ>の意味の喪失により、その戦略は有効に機能しなくなってしまったのである。リアル・プラン以降、沖縄系業者の製造量は最盛期の3分の1、T A個人も最盛期の月産8万枚が3万枚程度にまで落ち込んだ。

しかしながら、マクロな視点から見ると、ジーンズの方法である生地生産はリアル・プラン実施以降も上昇傾向にあり、ジーンズの需要自体は国内的には落ち込みは起っていなかった。この点は、第1に台湾系縫製業者が東北伯開発の優遇措置を活かして、当該地域に進出、そこに縫製基地を設置、安価な労働力と優遇措置を活かして、大量のジーンズを製造、輸出及び国内市場向けに出し始めたこと、第2にゴイアス州ゴイアニア、パラナ州シア・ノルテ、サンタ・カタリーナ州ブルメナウ、パラ州ベレン等に、サンパウロ市のプラス地区に相当するような縫製業の中心地が出現(安価な労働力と優遇措置を受けて)、プラス地区はブラジル国内及び南米諸国への衣服供給基地という位置から、サンパウロ市内への供給基地というように、その性格を変貌させたことと関連している。つまり、国内縫製業市場の再編成という「どうにもならない」条件の出現により、沖縄系縫製業者の苦

境が出現したのである。

この結果、沖縄系縫製製造・卸／小売業者にあつては、こうした苦境を乗り切るために、製造部門工場の閉鎖・販売業への専念等の対応策が取られたが、資金力のない業者にあつては従業員解雇や卸・小売の事業所の契約更新等にかかる資金の準備ができず倒産するものも12、3業者に達している。TAの場合、事業所はすでに購入してあつたので、こうした問題に直面することはなかったが、工場は閉鎖し「レバノン人商人」のように、モン・デ・オーブラへの注文へと変更、現在は卸・小売業専業となっている。また、独立した兄弟もこの当時に卸・小売専業となっている。さらにTAやその兄弟たちは、生き残りをかけてジーンズから商品の多様化・ジーンズのファッション化、オフィスのOA化等を共同で展開している。例えば、新製品のデザインは兄弟が共同で一流デザイナーを雇用して行っている。

この事例においても、当初においては事例1、2と同じ特質を指摘できる。家族労働力の集約的投下、〈タノモシ〉による資本の有効利用等は事業拡大の重要な条件となつてきた。しかし、事業拡大最大の効用の背景となつたインフレが収束したことや経済政策、国内縫製業界の再編成といった条件はエスニシテイに基づくさまざまな動員を無効にさせてきている。これは卸・小売業に展開せず、モン・デ・オーブラとしての下請け縫製業にとつても同様に作用している。1984年当時、150軒（最盛期には300軒）を数えたピラ・カロン地区の沖縄系モン・デ・オーブラ縫製業者も、国内市場の再編によるパトロンからの注文量の落ち込み等で転業あるいは廃業し、日本へのデカセギも多く出現しているという。

一ミドルマン・マイノリティへの道—クストウ—ラ業の場合—

ここでは、事例を通じて見てきたピラ・カロン地区の沖縄系人のミドルマン・マイノリティ化の過程を箇条書きにしてまとめ、本稿の結論としよう。

(1) ピラ・カロン地区への沖縄系人の移動は永住主義の析出を背景とする移民の都市生活、特に社会経済上昇の戦略として採用された〈ペリフェリー戦略〉とも呼びうるものを背景にしている。この戦略はまず生活の本拠であるとともに生産の場でもあつた住宅購入を速やかに達成することを第1目標とするといえる。この〈ペリフェリー戦略〉はピラ・カロン地区の発展・人口増加ともプラスの相関がある。縫製業以外の自営業種—商店・サービス業—の起業が当該地区内の人口増加を条件とする需要増加を背景に可能となつたのである。この〈ペリフェリー戦略〉は縫製・パステルという第1次エスニック職業から、第2次エスニック職業となつた金物（建設資材）、美容関連品販売等でも当てはまり、ピラ・カロン地区内に沖縄系人の同業者が飽和状態になったり事業拡大を計る際、さらには分家創設の際には、さらに周辺サン・マテウス等の地区へと展開を遂げていくのである。この結果、例えば、サン・マテウス地区はピラ・カロン村の〈分村〉的な性格を持つようになつている。

(2) そこでの沖縄系人のミドルマン・マイノリティ化は、旧移民によって選択されたフェイラから開始された。この旧移民の存在は、言語的文化的制約を持つ新移民＝戦後移民にとって、重要な役割を演じている。

フェイラからの展開は、他の条件を想定しなければ、家族労働力の多寡が重要な条件となり、投下できる家族労働力が多い場合には縫製業へ、家族労働力の少ない場合にはパステルへと分岐していく傾向が強い。フェイラでの商品であつた既製服の購入先としての

情報を獲得し、しかも予め習得していた技術（縫製技術）や機械（ミシン）、投下できる家族労働力等の諸条件を考慮した結果としてユダヤ、シリア・レバノン、アラブ系移民の〈パトロン〉からの〈下請け〉として縫製業は開始される。家族労働力を集約的に投下しての労働は工場労働者の妻が従事したイタリア、ドイツ系移民やブラジル人下請け労働者よりも有利な条件を持っていたといえる。

(3) サンパウロ市、ブラジルの人口増加等の背景から、下請けの需要は常にあり、家族労働力を投下して働けばそれだけ資本の蓄積が可能であった。モン・デ・オーブラ（下請け）としての成功という情報から同郷・親族関係のネットワークを利用したチェーン・ミグレーションが発生し、そのネットワークを利用した住居支援や縫製業としての技術・知識、言語を習得し、このエスニシテイのネットワークを利用したの〈タノモシ〉等の経済的文化資本を活用、まずは住宅と生産手段（ミシン・アイロン等）を購入し、独立する沖縄系人が続出した。この独立の際、ペリフェリーとしてのピラ・カロン地区は土地や住宅の安価等もあって有利であった。この条件は後に家族員の展開に際しても生産手段と住居という財産を伴う地区内への分家を促進していく条件となった。この分家創設は琉球大学の調査では、同じ区内が多く、シマの再生とともに地縁的親族組織の再組織化過程であった（資本の蓄積を達成した後には、縫製業の重労働性等の問題もあって、他の職業へと展開する沖縄系人も増加させることになった）。

(4) この過程で、パッサドール（アイロンかけ）、エントレガドール、ミシン修理・部品製造等の縫製業関連職種が発生、沖縄系人の縫製業参入を容易にした。これらはむしろ後続者の独身青年らが従事した職種である。この結果、ピラ・カロン地区では最盛期で5百世帯ものモン・デ・オーブラ（下請け）縫製業を出現させ、それぞれが中間生産者としての地位を占めた。

(5) 〈タノモシ〉による資本は第2次的には、生産手段の拡大に投資された。このことは家内工業的縫製業から下請け縫製業の〈工業化〉へと沖縄系人の縫製業を展開させることになった。このことはピラ・カロン付近に居住していた非日系ブラジル人労働力を数名から百名程度雇用するかたちで展開し、〈パトロン〉として縫製業界に君臨したエスニックグループ（シリア、レバノン、アラブ、ユダヤ系）とブラジル人労働者大衆の中間に位置する縫製業としての沖縄系人＝ミドルマン・マイノリテイとしての沖縄系人の姿を明確なものとした。1970年代初頭からは、それまでのカウサ・ソシアルからジーンズへの転換が発生したが、この商品の転換に伴う生産手段の投資も〈タノモシ〉やそれまでの資本蓄積（不動産への投資等）で可能となった。1980年代の高インフレ時代突入までには、沖縄系縫製業者の〈タノモシ〉を駆使した経済上昇はほぼ完了していた。80年代以降の高インフレは事業の拡大には好都合ではあったが、〈タノモシ〉自体の重要性は喪失している。「純粹に助け合いだったタノモシの時代は終わり、資本家がさらに資本を稼ぐためのタノモシの大型化、あるいは参集を中心的目的とした娯楽化の両極に分解した」という*8)。つまり、80年代以降、沖縄系人の文化資本としてのタノモシは一部成功者の集団を除き、生産財や住宅等の不動産購入資本の蓄積等の目的から娯楽中心の目的（エスニシテイの維持）へと変質を遂げたのである。1986年の琉球大学の調査によると、タノモシには88%の沖縄系人が参加しているが、「付き合い」での加入54.8%が「資金調達的手段」48.2%を上回っている[琉球大学1986;73]。

(6) 90年代初頭からは〈下請け〉縫製業から製造・販売を総合的に行う経営者を出現させたが、高インフレを背景とする家族労働力の集約的利用と文化資本としての〈タノモシ

>の利用は低インフレ時代、縫製業界の国内的再編、経済開放政策等によって、その戦略の有効性を大きく後退させることになった（これが、文化資本、エスニック・ネットワークを利用した沖縄のミドルマン・マイノリティ戦略の限界であった）。一方、この初期にはエスニックな利益を守るためのエスニック同業者組織も形成された。

以上のように、ピラ・カロン地区沖縄系人のクストウラ業は、主体の持つ文化（助け合いの精神等）・資本（タノモシ）・ネットワーク（同郷・親族・同体験）等を有効に利用しながら、ミドルマン・マイノリティの道程を歩んできたといえるが、それぞれの意味はミドルマン・マイノリティ達成後に、生産領域での動員から、シンボリックな領域（例えば、伝統行事等）での動員へと変貌を遂げてきている。

—註—

8) 大城は、ブラジルにおけるウチナンチュー経営の特徴は、1) 個人経営、同族会社の域を出ず、近代的株式会社を経営している人がいない。2) 企業転換拡大資金源（農業からフェイラ、雑貨店、クストウラ等へ転換するための資金源）がほとんど模倣の利用か、儲けの再投資でしかなく、銀行資金の活用はあまりない。このことは、その個人、その地域の発展段階として理解しなければならない、等の点を挙げている。大城 常夫「南米のウチナンチュー経営者論」1986 114頁。